

観音原の石仏、 たなか踏基

九月九日は、別名菊の節句、重九ともいわれる重陽の節句である。易で陽数の極である「九」が重なることからめでたい日とされた。この日は菊の花を飾り、丘などに登って邪気をはらい長寿を祈る風習が中国にあり、これが日本に伝わったものであるという。宮中では「観菊の宴」を開き、長寿を祝う節句の中でもっとも公的な性格が強いものであるが、民間にはさほど定着していない。

国民が微笑んで慶事を祝う出来事があった。

重陽の節句の二日前、秋篠宮比紀子(39)さまが、皇室41年ぶり皇位継承三位の親王を、東京都港区の愛育病院でお産みになったのは、九月六日午前8時27分、同病院を退院されたのは十五日午後0時25分、退院には秋篠宮(40)さまが付き添ったと報ぜられ、日本中が明るい話題で久し振りに湧きかえった。正に、菊の花が凜とした美しさを見せる最も相応しい季節で誠におめでたい。

「親王さま」の健やかな成長を願い、二千年の伝統と格式を重んじる、日本の皇室独特の行事や儀式が、海外からも注目されていると聞く。

誕生当日、天皇陛下から贈られた守り刀を枕元に置く「賜剣」、七日目に「命名の儀、悠仁」、身の回り品に付ける「お印、高野槇」が決まる。十月下旬頃には、巷間のいわゆるお宮参り、「賢所皇霊殿神殿に謁見するの儀」が、百二十日目頃、お食い初め「お着初め」が行なわれる。

何故皇位継承「男系男子」とされてきたのか？

一説に、裕仁昭和天皇の代に皇室の側室制度が廃止されるまでは、何代にも渡り皇室の側室制度に下支えされてきたからという説がある。正室の皇后もしくは親王妃等の所出によらない庶系継承

に守られて、昔の皇統譜で何と半数近い五十七代もの天皇が「男系男子」として踏襲されたようだ。皇族の帝王切開による出産は始めてで、現皇室での最高齢出産である。この度の秋篠宮比紀子さまの親王出産で、皇位継承を「男系男子」に限定してきた皇室典範改正慎重論がにわかに台頭し、棚上げ見送りの機運も同時に報じられた。

幻冬舎にお世話になる事が決まった日は、悠仁親王誕生の翌七日である。私にとつて幻冬舎から上梓の「奇妙な」シリーズは初めてで、ミス터리仕立ての第五弾は、記念すべき作品となりそうなる予感がする。「奇妙な受精卵」は、このおめでたい知らせの二日前に初稿が上がっていた。

私が文章を書く時間帯は、家内の迷惑も構わず未明起床して二時〜六時である。その起床時間が何時の間にか習慣になった。それから洗面とトイレ、公園でジョギング・ウォーキング、六三〇ラジオ体操、朝食を執りNHK朝ドラ観て仮眠が日課である。典型的な朝方人間で、夜手紙で、パソコン(PC)に向うことも無いではないが極稀である。夜小説を執筆すると、脳が興奮し寝付けなくなる。夜小説を執筆すると、脳が興奮し寝付けなくなる。私の場合、モティーフが浮かぶまでの時間が結構長い。構想してから略二ヶ月でこの長編を脱稿させた。歌人新吉の詠んだ「天空句」の謎解きと、女性の身体改造による超高齢自然妊娠をサブテーマにしたミステリーである。このまま出生率の低下に歯止めが掛らないと、日本の総人口が低下傾向をきたすと憂慮される。医学の進歩で人工授精による不妊治療による生も珍しくない昨今であるが、様々な悲劇も裏に隠されているのではあるまいか？本編には偶々、皇位継承報道にみられる高齢出産も側室制度も、盛込まれている。

こうしたミステリーの雰囲気醸し出す、重要な舞台となる千国街道「塩の道」を、八月末に取材した。はしがき・あとがきを添え取材ネタを盛込んだ本編修正原稿が、幻冬舎に届けられたのは、それから一ヶ月後の九月末のことである。

私が本を出して以後、親交が復活した高校時代の友人が、次は白馬山麓の梅池に行ってみないかと誘ってくれたのは、やはり前七月末取材の群馬馬尻焼温泉の帰途だったように記憶している。

長編ミステリー『奇妙な受精卵』の主舞台として、千国街道「塩の道」を私は選んだ。じゃあといって「塩の道」と「梅池」両方と欲張り、私が取材兼ねて応じたのは残暑の八月末であった。

糸魚川〜松本迄の「塩の道」全工程、三十里(百二十km)は二、三日でも踏破不能なので、せめて小谷村千国界隈を歩く事と、懸案だった大町市「塩の道博物館」「弾誓寺」だけは見聞したかった。結局実際に歩けたのは、JR南小谷駅から梅池入口バス停松沢口間の通称千国コースである。

地元観光協会や史跡文化財保護の人々の手に寄り、全工程三十里の内、十二里余りが整備され歴史の舞台から九十年振りに甦っている。小谷村の案内書に寄れば、今の旅人のためのコースは五つ設定されており、大網峠越え、地藏峠越え、高町越え、天神道コース、そして最も往時の雰囲気は今も残すと言われる千国コースである。

越後からの街道は、東道と西道があり、東道が主街道である。西道は、糸魚川隣の青海町から虫川・小滝・山之坊を経て、姫川に架っていた大網橋で東道に合している。東道は、歴史書に寄れば、厳密には二道あったようであるが、糸魚川で北陸道と分岐し、大野・根知を経て、信越国境に跨る大網峠を越え信州に入る。その後暴れ川の姫川と織り成すように、小谷村・白馬村から佐野坂

を越え、青木・中綱・木崎の仁科三湖を辿り大町に至る。途中根知の山口や戸土で信州に入り、三坂・地藏・大峯の峠を越え、千国の燕岩で、本街道に合する道は千国古道と称されるという。三坂峠(一一二五m)は、街道中最高所でここから国境の山々や日本海が望める。ブナやトチ、杉木立の原生林地帯を辿る道で、石仏や地藏堂がある。

前日松本の友人宅に泊まり、翌朝友人の運転で大町に向う。最初の訪問地、「塩の道博物館」は、庄屋・塩問屋だった平林家の母屋を主展示場としていた。平林家は味噌・醤油の製造販売も商う家だった由、懐かしささえ感じさせる建物である。

着いたのは未だ十時前、開館を危ぶんだが五百円支払い案内を請うと、中年の女性がにこやかに「塩の道」VTRを見せてくれた。大きな上がり框に大きな「鹽」の暖簾、帳場に座り友人に写真撮ってもらう。観光客も疎ら、我々以外には後から三人連れのみ。内部に平林家の長持等の調度品や古い機械機、街道の図やポツカ(歩荷)の装具や書付、鹽蔵・味噌蔵、松本・大町独特の七夕人形さえ飾られ、隣接に鎗流馬会館もある民族資料館である。ポツカ(歩荷)の仕事で、高賃金を得られたものの、過酷な山道の民で背に荷を担ぐ運送業は、元々それ自体が商人と兼業であった。

小暗い杉子立ちの間を縫い、険しい山坂を幾つも越えて神々が通り、人や牛が喘ぎつつ通っていた千国街道「塩の道」に兼業商人ポツカ(歩荷)や牛方と呼ばれる人々が自然に生まれた。物の本に寄れば、ポツカ(歩荷)の歴史は、行商人の発生と期を一にするという。山中に住む三箇の民とも同一視される。後に、馬借車借と呼ばれ賤民視され、運送にたずさわる河原者という民の発生である。この中から、連雀商人つまり店を持たない

で、背に物を担いで歩く商人が生まれたという。

ポツカ(歩荷)や牛方の服装は、夏冬共に外部の着衣は汗や雪を凌ぎ易い麻を用いた。麻の上着に麻の雪袴を穿く、稼ぎ時は主に冬であったので、蒲八バキと呼ばれる、葡萄の蔓や科の樹皮で編んだ脚絆に、藁沓、時にカンジキを付け、腰に小さな莫薩を巻き、頭は全て粗い麻布で覆い、鼻と口はしっかりと手拭で包む。数食分の握り飯を背負子に付けて歩き、数人が群れて行くのである。手には、今でいうピッケル代わりの荷杖棒を持ち、疲れると荷を背負ったまま、背負子の下に荷杖棒を充てて休んだ。先に鉄の氷斧が付いていて、凍った雪面を削りながら足場を確保した。

ポツカ(歩荷)や牛方は、頼まれれば時代により季節により何でも運んだ。手甲を付け頭に頭巾のように手拭を巻いた女ポツカ(歩荷)は、手製衣類から、奥山の炭焼きに入る人の食料から炭を運んだ。男ポツカ(歩荷)は、勿論カマス入りの塩・海産物・薪・炭・米・味噌の日用品を運んだ。商いになる魚介類、春にはナガシ(鯛の一種)、初夏にはヒダラ(干鰯)、夏には昆布巻きに欠かせないニシン(鱈)、秋にシオマス(塩鱈)、正月近くには年取り魚の鰯といった按配である。信州の帰り荷は、米麦等の穀類・野菜・煙草・麻である。退館際「塩の道博物館」の女性に「弾誓寺」を聞く。

「弾誓寺」には、案内に弾誓上人の木像がある由なのだが、堂の外からは見る事ができない。可能なら住職に聴きたいことも沢山あったのだが、玄関のベルを押しても人の気配がない。止む無く賽銭を上げ足跡のみ残しその場を立ち去る。車中、私が何故この寺に拘泥したのか、弾誓上人の念仏とポツカ(歩荷)の縁等、私の調査知識を披露する。「住職はそんな故事を知っているだろうか?」と友人が私に疑問を呈する。

国道148号線沿い、友人のネット馴染の女性店主の店、喫茶店「ぷう」に立寄り軽食を執る。郷土が生んだスキー五輪選手荻原健司、上村愛子の二人のサイン入り色紙が壁に架っている。冬には多くのスキー客が店に立寄るのである。

車を店に預けて、歩いてJR大系線信濃森上駅から二両電車に乗り、南小谷駅下車する。乗り手少ないワンマン電車である。駅から姫川を横切る橋を渡り、坪山の急な登り、土倉、宮下、千国、沓掛と経由して松沢迄、随所に石仏がある通称千国コース「塩の道」約十数kmの始まりである。

坪山・庚申塔、小土山石仏から細い山道、大別当石仏、小谷中学裏の源長寺の参道口に三十三体の石仏、宮下石仏等、無数の野仏に遭遇する。

東海道や中山道等と異なり、派手な大名行列は無論、物見遊山や参詣の旅人も居ない物資運搬の生活の間道、塩と海産物、その荷の帰りに豆・煙草・麻を運ぶポツカ(歩荷)や牛方衆、冬季行倒れの旅人や牛供養のための野仏という説もある。千国諏訪神社境内を抜けた辺りからR433を道成りに行く、復元された千国番所跡・千国の庄資料館は今の旅人の訪れる者も無く休館中である。千国番所跡の石碑脇の石に都都逸一句。

蟻も通れぬ千国の関を

夢は巧みに抜けていく・・・禅心

殆ど我々以外「塩の道」紀行の旅人に出逢わず、所々の「塩の道」道標にホットする。農家の人も関心を示さず、犬が胡散臭い我々をみて吠える。親坂の石仏の辺りから再び険しい山道である。

この辺りは坂の難所であった由、重荷を背負った牛が歩き易いようにと、幅二尺余りの道に敷石が残っている。登勾配の道を水が滴り流れ、脇に

牛つなぎ石の表示、巨石を穿った穴に牛の手綱を結んだのであるつか？弘法の清水、牛や牛方等旅人が咽を潤した冷水が山から滾々と湧き出す。

冷水を口に含み暫し休憩の後、牛方宿へ向かう。友人が、二十数年前会社の広報担当時代に取材でふらりと泊り、牛方宿六代目民宿の主人千国徳重さん(当事七十六歳)と談笑し、可愛く元気な孫娘二人の印象が残っていると昔を語る。

沓掛茶屋で五度目の休憩である。

旅人を泊めていた古い民家を買取り夏場のみ営業している由。途中我々が出会った旅人は僅か二人だったが、茶屋女将を迎えた今日の客は、我々を含め三人と笑いながら語る。その話を肴に地ビールを飲み一息いれる。沓掛茶屋を辞し、だらだらと高原を行く、高遠石工が彫ったという前庭の弘法大師坐像に守られるかのように、赤い前垂れも可愛い百体観音像が居並ぶ原に出る。どの観音像も肩寄せて、北アルプスの稜線を眺めている。

松沢口バス停に到着。今夜泊る予定の白馬岩岳の民宿のヒュッテ・アルプの女将に携帯電話する。親切な女将が車で迎えに来てくれる。バス道を十分で下る。喫茶店「ぷう」に寄り、預けた車に乗換えて予約の岩岳の民宿に着いた。店の名「ぷう」とは最初可笑しな名だと思っただが、大風や悪霊・病魔を防いでくれるこの付近の風切地蔵の話聞き、この界隈は風が強いのだと知り納得する。

友人が面白い所があると案内された場所、民宿直ぐ裏手、切久保の観音原である。四角な草の広場をぐるりと、百体余りの石仏が取囲んでいる。

案内板に《白馬村文化遺産、観音原西国・坂東・秩父百番観音像(昭和52年6月1日指定)》ここには西国・坂東・秩父の百体観音が全部そろってありますが、この他に馬頭観音など合せて計百八十七体の石仏が立ち並んでいます。造立

年代は、江戸末期の文久年間といわれており、北側に坂東三十三番、西側に西国三十三番、南側に秩父三十四番とあり、壮観で独特の雰囲気漂わせています。また、石仏公苑としては、その規模・内容からいって、松本・糸魚川間のいわゆる塩の道にあつて、随一のものといつて良いでしょう。》とある。その数で前山百体観音の約倍の規模、弘法大師像や馬頭観音を含め、全部で百八十七体の石仏が芝生広場を取り囲むように並んでいる。

製作年代などは定かでない。高遠石工の作と伝えられ、旅人の道中安全などを願ったものとされているが、雰囲気は、何やら妖しい靈気が充満しているような気がする。まるで草の広場に立つと、供養の靈魂が笑いながら懇談会を開催しているような、奇妙な靈場の中に居るような気持ちになる。今回私にとって「塩の道」取材の最大の収穫場所は、前山百体観音と切久保の観音原であった。

前山百体観音は、北アルプスを一望する小谷村千国親の原に、八十余体がなだらかな山の斜面に仲良く肩を寄せ合っている。旅人はここで息を入れたであろう。ここでは、何かほっと胸を撫で下ろす安らぎを感じる。横に並んだ観音様、昔からここは絶好の休息の場所だったに違いない。

私は白馬切久保の観音原に興味、いや強く惹かれたといつても過言ではない。何故この略角形の芝の原があるのか？この街道に足跡を残して亡くなった多くの靈魂が、甦ってハレの日に一同に会する広場だったのではあるまいか？一体この石仏はいったい何時の頃から、この草原で佇んできたのであるつか？もしかすると、ある夜相談の結果、居心地の良い切久保の原に移住しようということになり、各地に点在していた観音様が寄合っ歩いてきたのではないかと思われる程である。広場の回りに鎮座する姿は、まるで向合って何かを談

合しているという表現が相応しい。あるいは野仏の囲む広場で、牛方やボツカ(歩荷)の旅人を迎えて人々は、何か祭事を催したのではあるまいか？

両方の場所共に、吹雪、雪崩、豪雪、滑落、地滑り、洪水等による天変地異の不慮の事故で逝った人々、ボツカ(歩荷)業、牛方業の旅人へ捧げた生行者からの祈りの証であったのかもしれない。

人伝に聞いたのだが、明治か昭和か定かではないが、付近の道路事情がなにかで一連の観音像が廃棄の憂き目にあつたところを、村人が一体一体背中に括り付けて、一箇所に運んだという話である。

取材で歩いたのは、全工程のほんの僅かな旅程に過ぎない。大町「塩の道博物館」や「弾誓寺」、JR南小谷界隈のワンマン電車、夕焼けの茜色に染め出す宿場脇に咲く芙蓉の花、朽ちかけた牛方宿の復元された建物、がらんとした人つ子一人居ない千国の庄の資料館の門、重い荷駄を担ぐ牛の肥爪痕を重ねた苔生す敷石、牛を繋いだという巨石の穴、微笑みを残しながらやがて石くれとなつて路傍に立ち尽くす石仏、雑木林を渡る峡谷の風、あでやかに野を舞う名も知らぬ蝶の戯れ・・・。

深夜私は、民宿直ぐ裏手の観音原の靈魂の訪問を受けた。女将と一緒に夕飯で飲んだ麦焼酎で酔った臙な脳裏に、荷杖棒を片手にして、集団で行動する牛方やボツカ(歩荷)の喘ぎ声を聞いた。そんな一団が、命を賭して重い荷駄を背中に背負い、「塩の道」を行く光景を思い浮かべながら、泊りの白馬岩岳ヒュッテ・アルプで、持参の携帯小型パソコンのキイを朝まで叩いていたのである。

翌朝、ゴンドラとロープウェイを乗り継いで白馬梅池自然園を訪れた。梅池のガイドで花博士の民宿の女将の勧めもあつて、浮島湿原まで足をのばし、遅いニッコウキスゲの群舞を楽しんだ。

了